
crescent moon

ゆう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c r e s c e n t m o o n

【Nコード】

N 3 3 8 0 P

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

初々しい高校生たちのお話。

見た目で損をしてしまう佐藤孝洋くんは、感情表現が苦手な有吉千紗ちゃんと、もっとラブラブしたいなあ・・・と思っているのです
が・・・。

明朗快活な吉見月子ちゃんは、おねい系先輩の千種雪生と微妙な関係。

これが有名な友達以上恋人未満ってヤツ？

などなどなど・・・

まだまだ未熟者・・・まだまだ満月のように还不是な高校生
たちの小さな物語集。

恋心（前書き）

人見知りで重たげな瞼と短髪のせい？で損をする佐藤孝洋くん。でもじつは彼はすごく心根の優しい健全な高校生。

そんな孝洋くんの彼女はかわいい千紗ちゃん。でも千紗ちゃんは、中学生の頃は教室外登校することもしばしばあった、感情表現が苦手な繊細な女の子。

そんな不器用な二人のお話。

恋心

きっかけは何だったかなんて、ほとんど覚えてないけど、多分、顔が好みだったことが始まりのはず。

「孝洋、ここ分かんない」

千紗が数学のプリントをシャーペンでコツコツしながら、聞いてきた。

学校を休みがちな千紗からすれば、毎日登校しているだけでもすごい進歩で、少なからずそれは俺のおかげだ、とクラスメイトの吉見に言われたことがある。

「うん？」

向かい合わせで座る千紗の手元を覗く。

白くて細い指。

多分女の指にしては節が目立つ方だと思う。

白い枯れ枝のような手だ。

でも、俺はそんな千紗の手を握るのが好きだった。

自己満だけど……

その手は俺がいないと頼りなく折れてしまいそうだし、風が吹けば飛んでいってしまいそうなのだ。

それはきつと千紗自身のイメージでもあって…。

だから、俺が手を繋いでいれば千紗を守れる。そばに居られれば、きっと千紗を笑顔にできる。

そんな錯覚を覚える。

「これは、xに代入するだけ」

千紗は俺に言われた通り代入すると、その枯れ枝のような手で握ったシャーペンを必死に動かす。

そして

「できたっ。合ってる？」

俺にプリントを渡す千紗は、うつすら頬が紅潮し、達成感にも似た笑顔を浮かべていた。

正直、そこまで難しい問題じゃないのだから、数学が大嫌いで、毎回サボろうとする千紗には大仕事だったはずだ。

そうやって一生懸命の千紗が意地らしくて…可愛くて…愛おしくて…。

俺も頬と目尻が緩むのを抑えられない。

「うん、合ってる」

そう言つて、赤ペンで大きな丸印を一つ。

「やった」

千紗は極上の笑顔を見せた。

うん…。

こんな千紗の笑顔、なかなかお目にかかれない。

…ホントは…

今この瞬間に、千紗を抱きしめたいし、キスしたいのだが…。

ぐっところえる。

千紗は分かってない。

俺がどれだけ我慢してるかを。

俺がどれだけ千紗を独占したいかを。

俺がどれだけ、千紗のことを好きかを。

俺がどれだけ千紗を大事にしたいと思っているかを。

そして、俺が毎日それらのジレンマと戦っているのかを。

「ありがとう、孝洋。

あたし、図書室によって帰るね」

「一緒帰ろう、待ってるよ」

「でも…時間かかるよ」

「いいよ」

時間なんていい。

いくらでも待つさ。

今でも千紗が俺にハマってくれるのを、ずっと待ってる最中なのだ

から…。

恋心

立ち上がった千紗に、俺はもう一度言った。

「千紗を、待つとくよ」

そう？と少し首を擡げる千紗は、何か考えるように宙に視線を漂わせると、すつと俺の横へ来た。

「ね、何かお礼したい」

「…だれに？…なんの？」

突然の言葉に俺は聞き返す。

すると千紗は俺の座る椅子の隣の席に座った。

「孝洋に。数学教えてもらったお礼」

恥ずかしそうに上目遣いで言う千紗。

コイツは俺の理性を試しているのだろうか？

人気のない教室。

遠くから吹奏楽部の楽器の練習と、野球部のかけ声が聞こえてくる。

「いいよ、礼なんて」

千紗に変なことをしないように、机上のシャーペンを回して気を紛らわす。

「でも……」

「いいから、早く本借りて来いよ。暗くなる」

俺の言葉に、千紗はまだ何か言いたげだったが、しゅしゅといった様子で教室を出て行った。

「はああ……」

大きなため息と共に俺は机に突っ伏した。

何の修行だ！？

なぜ彼女といて、こんなに気苦労をしなきゃなんないんだ！？

そして…なぜ千紗は気づかないんだあ！？

とにかく、俺も健全な高校生だから、いろいろと興味津々な年ごと
なわけだ。

で、彼女がいて、そいつのことがとにかく好きで、千紗の性格上（
基本的に千紗は集団行動が苦手だから、教室を抜け出すんだが）、
二人きりになることも多い。

今だってそうだ。

そして付き合い始めてもうすぐ半年。

手を握るだけでは物足りない。

軽いキスだけじゃあ、気持ちがおさまらない。

ヤラシイ気持ちで千紗を見ているわけではないのだが…。

千紗はどう思っているのやら…。

「はあ…」

もう一度ため息をつき、俺は目を閉じた。

恋心

「！」

体がピクリとなり目を開ける。

あたりを見回すとさっきより暗くなっており、自分が寝ていたのだと気づく。

「おはよ」

後ろから声がしたので振り返ると、千紗が後ろの席で本を読んでいた。

「千紗…起こせよ」

「ん…なんか…こういうのもいいなって…」

非難がましく言う俺に、千紗は本に琴を挟みながら訳の分からないことをいった。

「帰ろう？」

バックに本をしまいながら、千紗は言う。

「ん」

俺は机の脇にかけていたカバンを持ち、時計に目をやった。

7時前。

「30分くらい寝てたみたいよ」

千紗もカバンを持って立ち上がった。

俺は無意識に、千紗の頭に手を置き、髪を梳いた。

真っ直ぐでサラサラの髪だ。

「な…なに？」

千紗が警戒したように身を退いて聞く。

「や、サラサラだな〜って」

俺の短い髪とは大違い。

「彼氏相手に、そんな警戒すんなよ」

苦笑して言うと、千紗はバツが悪そうな…そして困ったような複雑な顔をした。

千紗を困らせたいわけじゃないんだよ…。

「何もしねーよ」

自分に言い聞かせるように言って、俺は千紗に背を向けた。
そして歩き出す。

「電気、消すぞ」

「うん」

後ろからついてきた千紗の声を聞き、俺は教室の電気を消した。

すると...

「...!?なんだよ...」

千紗がおもむろに俺の背に抱きついて来た。

「た…。あのっ…」

千紗のか細い声。

少し頭を動かして振り返るとすぐそこに、さっき俺が指を通した髪。

さっきまで遠かった千紗が、すぐ側 鼻先にいた。

恋心

ギリギリだった俺の理性は…本能に負けた。

体を擦って正面から千紗を抱きしめる。

薄いブラウス越しに、千紗の細い体から体温を感じる。

鼻先にある髪からはシャンプーの香りがする。

細い千紗の体は、俺の腕にすっぽり埋まり、少し首を擡げれば、千紗の細い肩に、俺の顔は沈む。

でも…この体制も、本能に負けた俺には自制心をかけられない思いに拍車をかけた。

「た…たかひろ…」

身を固くする千紗に、俺は今までの恨みだとかばかりに意地悪したくなった。

「俺の気持ち…分かってんの？」

「えっ…」

上目遣いに千紗を見上げると、戸惑い真っ赤な千紗と至近距離で目が合った。

「千紗が俺に抱きつくから悪いんだぞ」

そう言つて、俺は首筋にかかる千紗の髪を一つに纏めるように掬った。

露わになる細い首に、俺はキスした。

「た…たかひろっ…」

戸惑いと驚きを隠せない千紗の声。

俺の胸に手を当てて俺を離そうとするが…。
逆効果。

髪から手をはなし、千紗の細い手首を掴み、引き寄せる。
そしてその手は離して腰に腕を回して引き寄せた。

お前が悪い

と言ったためか、意外と千紗は抵抗しなかった。

きつめに首筋をすい、唇を離す。

そして引き寄せた腰はそのままに千紗を見つめた。

「しばらく消えないの、つけたから」

「!？」

真っ赤な千紗が、俺の唇のあとに手を当てる。

痕はついたはずだが、きちんと見えないところにつけた。
しかし、それは千紗には言わない。

俺はそのまま、ゆっくりと千紗へと顔を近づける。

睫を揺らしながら目を閉じた千紗はゆっくりと顔を上げる。

俺はそれを全て見ながら口づける。

軽いのではないヤツを。

「んっ…」

頑なにがっちりと歯を食いしばる千紗。

………なんと頑固な…。

今まで俺は我慢してきたのだし、さっきは千紗から抱きついてきたのだ。

これくらい許してくれてもいいはず…。

「…千紗…口、開いて？」

自分から唇を離し、やっと理性的になれた俺は真っ赤な千紗に優しく言う。

千紗は俯いたまま

「だって…」

と言った。

「…あたし…は…初めてだから…。分かんないもん」

恥じらい、唇を尖らせる千紗が可愛くて仕方ない。

わざとか？

また俺を試しているのだろうか？

恋心

もじもじする千紗の頬を両手で掴み、顔を上げさせる。

「んっ…」

「…安心しろ。俺も初めてだ」

何の自慢にもならないが、気づくと俺は自信満々にそっくす千紗に宣言していた。

今度はポカンとした千紗が、呆然と俺を見上げていた。

ちよっつと…間抜けな宣言だった…。

それを証明するように千紗は笑った。

「な…なんだよ、悪いか？」

バツが悪くなり、俺はそう言う。

「うっん。全然」

微笑んだ千紗が、ゆっくりとした口調でそう言った。

「さっき、月子と会ったの。月子に、孝洋に何かお返しがしたいって言ったら、『キスでもしてやれば』って言われたの。」

千紗がまた頬を染めて、千紗の信頼する友たちである吉見との話しをする。

千紗…吉見に俺とのこと話すんだ。

そう思うと、俺はちゃんと千紗に彼氏って思われてんだって…何だか胸がキュッと締め付けられるような思いがした。

「…初めてだから…あの…あたし…」
「いいから…目、閉じて」

俺は千紗を黙らせて、再び千紗の唇と自分のを重ねた。

何度も啄むようにして、少し唇を離す。

うつすらと目を開けると、真っ赤な千紗がいる。

「少し…口開けて…」

触れそうで触れないくらいに離れて言う。

すると千紗は少し目を開けて俺と視線を絡めた。

クイツとまた顔をあげて目を閉じると、おずおずと薄く口を開く。

正直俺は緊張して、手なんか汗でぐっしりだった。

緊張で心臓は飛び出しそうなくらい脈打ち、頭がクラクラする。

ゴクツと唾を飲む。

こんな緊張は千紗に告った時以来…？
もしくは合格発表以来だ。

俺も乙女のように震える唇で千紗のそれと重なる。

深く。

「んっ…ふっ…」

角度を変えて深く口づけるたびに漏れる、千紗の苦しげな声。

俺の理性は、またもや吹っ飛びそうだった。

本当に頭が痺れた感じがするのだ。

うまく息ができないから、だけではないはずだ。

俺は、まるで千紗を食べるように千紗の唇を貪り、舌を吸う。

どんなに唇を重ねても、まだ足りないと思う。

俺は、くるりと向きを変えて、千紗を壁に追い込んだ。

「えっ…んうっ…」

壁に押し付け逃げ場のない千紗と、一番深く口づける。

それは永遠のようにも感じられた。

恋心

壁に千紗を追いやり、その千紗を挟むように自分の肘を壁につく。

暗くなり始めた教室には、校庭のライトが差し込み、呼吸を荒くする俺たちを照らしている。

薄く目を開けると、眉根を寄せ、苦しげに頬を染める千紗の表情が眼前に迫る。

こんな千紗の顔、初めて見た…。

そして、その表情はまるで俺の気持ちを煽るようだった。

「千紗…」

唇を離し、千紗を呼ぶ。

「ん…？」

肩を上下させる千紗が俺を見上げる。

ああ…。

ライトのせいだと思いたい。

千紗の真っ白な白眼は濡れてまるで真珠のように綺麗だった。

きっと今日、千紗との距離は縮まった。

体も心も…。

満足しなければ、と自分に言い聞かせる。

これ以上はわがままだ。

なのに、全然足りないと思うし……その先をしなくなってきた。

もちろん俺はまだ清らかな少年なのだが…。

「ち…千紗…」

「うわ！えっ…ちよ、ちよっと！な…な、なに！？」

俺はずいと千紗に迫り、その脚の間に自分の膝をねじ込んだ。

俺の方が背も高いわけだから、俺の膝は千紗の股を割いたのだが…。

「孝洋の嘘つき！何もしないって言ったらじゃん」

蒼白の千紗が、まるで汚れた雑巾を見るような目で俺に言った。

た…確かに言ったけど…

「おまつ…！今更なこと言うか、フツウ」

ディープキスまでさせといて、言うセリフだろうか！？

それにあれは無理強いでもなく、双方の同意のもと行われた正当な行為のはず…！

なのに…

「だってそうじゃん！」

ムキになる千紗に、勢いで俺も言う。

「じゃあ嘘ついでに、千紗は俺と…！」

最後までいってくれるんだよね？
いつかは。

今日だと嬉しいけど…

「千紗、俺いつかは千紗と…その…」

いざ口にしようと思うと言いよむ。

この一言を今口にしてしまうと、千紗との距離は離れてしまうのではないかと、不安がこみ上げてきた。

「そのお……」

「…なに？」

言葉に詰まった孝洋に、千紗は首を傾げた。

孝洋は不安な気持ちを隠すように、千紗から体を離し、拳をキュッと握る。

「や、急にあんなことして、…嫌…だった？」

この質問の答えにも、かなり不安はあるのだが、とりあえず、今の千紗の気持ちが孝洋は聞きたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380p/>

crescent moon

2010年12月20日19時15分発行